



くすのき

学校のシンボル
くすの木令和8年6月30日
さいたま市立土合小学校

子どもたちに付けたい力

校長 日比 圭都

梅雨の合間に、夏の気配が少しずつ感じられるようになりました。子どもたちは日々の学校生活の中で、さまざまな経験を積み重ねています。

先日、5年生は「館岩自然の教室」で2泊3日の宿泊学習を行いました。自然の中での集団生活は、決して楽しいことばかりではありません。

友達との関わりや、慣れない生活への戸惑いもあったことでしょう。しかし、その一つひとつを乗り越えながら自分の役割を果たし、仲間と協力する姿に、大きな成長を感じました。

また、6年生は3校親善球技大会に参加しました。結果だけでなく、チームとして心をつにし、最後まであきらめずに取り組む姿は、学校のリーダーとしての頼もしさを感じさせるものでした。とても誇らしい気持ちになりました。

こうした行事を通して改めて感じるのは、「学校は小さな社会である」ということです。友達との関わりや協力、時には意見の違いに向き合うことなど、社会の中で生きていくために必要な力を、子どもたちは日々学んでいます。

近年、「非認知能力」という言葉をよく耳にするようになりました。テストの点数などで測れる力だけでなく、「やり抜く力」「協力する力」「自分の気持ちをコントロールする力」といった、数値では表せない力です。これらは、これからの社会を生きていく子どもたちにとって、ますます求められる力です。その中でも、私は「我慢や辛抱」を経験することを重視したいと考えています。思い通りにいかないことに会ったとき、少し踏ん張ってみる経験は、子どもを大きく成長させます。

最近、子どもたちの口から「ストレス」という言葉を頻繁に耳にするようになりました。もちろん、子どもの気持ちに寄り添うことはとても大切です。しかし、大人が心配するあまり、その言葉をそのまま受け止めすぎてしまうと、乗り越える機会を奪ってしまうことにもつながります。ここで必要なのは、「大丈夫、できるよ」と背中を押すことではないでしょうか。子どもたちは本来、自分で考え、乗り越える力を持っています。少しの困難に向き合い、自分なりに乗り越えた経験こそが、自信となり、次の挑戦への力になります。学校では、これからも子どもたちが「できた」「乗り越えた」と実感できる学びの場を大切にしていきます。

さて、あと3週間足らずで1学期の終業式を迎えます。子どもたちにとって楽しい夏休みが始まります。夏休みは家庭で過ごす長期の休みであり、自分の時間をどう使うかが問われる意義のある期間でもあります。この夏休みには、日頃なかなか取り組むことのできないことに、じっくり挑戦してほしいと願っています。例えば、本を1冊読み切ること、家庭の仕事を毎日続けること、自由研究に根気強く取り組むことなど、すぐに成果が見えにくいことでも構いません。意識して欲しいことは、「我慢して続けること」「辛抱してやり抜くこと」です。途中でうまくいけなくなったり、面倒に感じたりする場面もあるでしょう。しかし、そこでやめてしまうのではなく、もう一步踏みとどまる経験こそが、子どもたちの力を大きく伸ばします。「つらいからやめる」「苦しいから避ける」のではなく、「少し我慢してみる」「あと少し続けてみる」。その積み重ねが自信となり、これからの生きる力につながっていきます。

ご家庭におかれましても、子どもたちの「できない」「やりたくない」という言葉の奥にある思いを受け止めつつも、すぐに手を差し伸べすぎることではなく、「もう少し頑張ってみよう」と背中を押していただければありがたいと思います。この夏休みが、子どもたちにとって「やり抜いた」「乗り越えた」という経験に満ちたものとなることを願っています。